川崎城跡公園の整備が始まっていますよ

川崎城は約八百年前の鎌倉時代（一二〇〇年ごろ）、塩谷朝業公が築城したといわれています。

この川崎城跡公園は、矢板市指定文化財に登録（平成元年）されているため、前号（第六号・七月十五日発行）でご紹介した「川崎城跡公園整備計画」を実行するに先立ち、歴史的な埋没品がないかを調査するため、市民会議のメンバーを中心に発掘作業が行われました。この結果出てきたのは、大量の土とメンバーの汗だけだったという笑い話が残っています。

整備作業は七月の中旬から開始され、本丸と二の丸を含む「眺望を楽しむゾーン」の伐採や間伐が再生会議メンバーの手によって行われています。眺望を遮っていたサクラやツゲを間伐したことにより、本丸は光が差し込む明るいエリアに生まれ変わりました。

作業を始める前の公園内は草が生い茂りうっそうとしていて、公園としての魅力が感じられない場所だったそうです。

危険を伴う既存遊具の撤去のみ業者へ委託し、他は出来る限りメンバーの力を合わせて作業を進めていくそうです。

九月十五日にはあんどんまつりに向けての会場整備や、本丸を囲む園路にウッドチップが敷かれます。園路は今後本丸の外周にも新たに整備され、東側駐車場からも直接本丸まで登れるようにする予定です。

十月以降、本丸東側部分の本格的伐採が行われ、終了後は本丸から矢板市街地が一望できる城跡公園として新たな姿を現すことになっているそうです。

今までは薄暗く、ウオーキングの途中に寄ることも少なかった場所が、今後は川崎城跡公園を目指しウオーキングを楽しみ、本丸より市街地を眺めゆっくりとした時間を過ごせる憩いの場所となるかもしれません。整備後の、生まれ変わった城跡公園がどの様になるのか今から大変楽しみです。

現在の本丸から見た北東の風景。これがどう変わるか？

矢板の名産紹介

「よそに行く時、何をお土産にするか困ってしまう！」そんな方も多いのでは？今号から２回にわたり、伝統を守りながら地域に根ざしている和菓子店をご紹介いたします。ぜひ一度ご賞味あれ！！

和菓子司 亀田屋（鹿島町）

昭和四十年、初代当主が氏家・亀田屋にて修行後、現在地に創業。「和菓子は、あんが勝負」で、あずきは吟味した北海道産を使い、あんは、お菓子の種類によって固さと配合を変えるなど、大変気を使うとのこと。当初は和菓子が専門でしたが、若い人にも食べてもらえるような、洋風菓子（カステラ・ブランデーケーキ）などにも力を入れてきています。特に、和洋折衷の冷凍生クリーム大福は、現在の二代目当主が発案。クリームは日持ちが悪いため、食べたいときにいつでも食べられるようにと冷凍に。年間を通して好評ですが、冷凍とはいえ、お買い求めいただいたら、早めに召し上がるようにお薦めしています。

そのほか、いなかまんじゅう、お赤飯、もち（誕生もち・紅白もちなど）も創業以来、一年中販売しています。また、健康食品ブームにあやかり、沖縄の黒糖入りの利休饅頭など時代の流れを受けながらも、昔からのお菓子を受け継ぎながら新しいものを生み出しつつ、お客さまのニーズに応えています。

お勧め菓子【鳥花】【やいた】

関龍庵（扇町）

昭和十年に創業。小学四、五年生のころから、あん作りの手伝いをさせられたという当主は二代目。「吉澤やさん」の名前がなじみ深い方が多いかもしれませんが、平成七年、お店を建て直したときに、新たに「関龍庵」の看板を掲げました。由来は、当主の名字の関谷、名前の龍男から二文字をとって…。

名物の八起最中は二代目が二十四、五歳で、まだ矢板に昭和座という映画館があったころ、「路傍の石」の映画を観た時の「一度しかない人生…」という言葉にヒントを得て創り出しました。

試行錯誤の末、やっと初代に認められた作品とのこと。

「ほかに売れ筋の品は？」とお聞きすると、「このお店の品という安心感で買っていただいているので、ご希望に添うように私が選んで詰め合わせています」とのこと。

特に、涼しげな水饅頭は冬でも人気があるとか。「路地を入った場所で分かりづらいのでは？」との問いには「〝ここだ、ここだ〟とお店を見つけてくるのが楽しみになっているようです」と明るく。

「あんが命」という初代の言葉を守り続け、二代目も誇りを持って菓子作りをしているのが伝わってきました。

代表菓子 八起最中